

日本文學研究史

藤田 徳太郎

一 史書の研究

日本文學の研究の態度は、既に古事記の中に現れてゐる。即ち、口誦文學として傳へられて來た神話傳説、物語の類を、いかに漢字によつて、國語的表現をなし、これを可視的なものに移すかと云ふ努力である。古事記の文章の中に記されてゐる細註は、此の點より見て、日本文學研究の最古の記録であると云ふ事が出来る。これによると、古事記の撰者は、次の如き研究の態度を取つてゐる。

1 漢字の音に關する註

イ 久羅下那州多陀用幣流之時 流字以上
十字以音

右は漢字を假名に使用したと云ふ事を註記したものの。

ロ 宇比地邇上神須比智邇去神

右は漢字を假名に用ひても、その同じ漢字の發音に相違があると云ふ事を示したものの。

2 漢字の訓に關する註

神集々而 綱集云
都廣比

3 古語の解釋

彼自如_二赤加賀智_一而……此謂赤加賀智
者今廢舊者也

4 歴史的事實や典故等の説明

イ 此天皇之御子等并八柱男五
女三

ロ 天津久米命此書久米直
等之祖也

ハ 倭日子命此王之時始而
於_レ國立_レ人垣_一

1及び2は文字の音訓に關する研究を含み、3は註釋上の所謂語釋に屬し、2も亦、此の中に入る性質のものもある。4は文化史的研究とでも名づくべきもの。これを要するに、古事記の細註には、既に、文字、言語、文化、歴史に對する文學的研究が、それ／＼含まれてゐるのであつて、後世の註釋的研究の萌芽も亦その中に存する。これは、古代の口誦文學の中にはもとより存しなかつたもので、それに對する、撰者の研究の附加である。勿論、それは單に古事記の撰者のみならず、從來の意見も參考せられて、此の中に入つてゐる事であらうが、これを集成した撰者の功勞は決して尠少ではない。

古事記は國語的表現をなす事に努力が拂はれたが、日本書紀に至つては、全く漢文的表現に改められたが爲めに、文學の専門家でなければ讀解が容易でなくなつた。加ふるに、古事記よりも日本書紀の方に、史書としての權威が認められて、日本書紀の註釋的研究が盛んとなつた。

日本書紀は古事記の成れる和銅五年(一三七二)を遅れる八年、養老四年(一三八〇)に成つたが、早くもその翌年、

養老五年には、古事記の撰者で、且つ日本書紀編纂者の一人なる、太安麻呂が、日本書紀の講義をなしてゐる。それ以後大學の博士が、朝廷に於て、累年これを講義した。即ち平安朝時代の前半には、

弘仁三年(一四七二) 承和十年(一五〇三)

元慶二年(一五三八) 同 三年(一五三九)

延喜四年(一五六四) 承平六年(一五九六)

天慶二年(一五九九) 康保二年(一六二五)

の如く、頻繁に講じられてゐる。その講義の筆記を日本紀私記と云ひ、今日數本が残存する。それによると、

1 漢字の音訓(これが大部分)

イ 大薙以未

ロ 天地未割安女津知以未
大和可爾須

2 語句の解釋

盛酒入

3 歴史的事實や典故等の説明

イ 久比莫古蜜洲流三人名

ロ 東韓東臨者曰羅城高
羅城余林城是也

の如く、古事記の細註の態度と殆ど變らず、殊に、訓點を附する事が、その重要な目的であつた。然るに承平六年

の私記と推定せられるものによると、訓點が最も重要な問題となつてゐる事は云ふまでもないが、

1問。此注文在「惶根尊之下」、而諸本多在「面足尊之下」如何。(亦曰「吾屋惶根」云々の條の細註に關する疑問)

2問。或本无「伊弉諾尊四箇字」。今案、自「最初」至「最後」、以「何爲」正。

師說。无「此四箇字」者誤本也。可「書入」。

又問。今考「古事記等」亦无「此等字」。此猶神代七世之内、起自「最初」迄「于最後」歟。若爲「異本」如何。

師說。(中略)不「可」爲「異本」。(自「國常立尊」迄「于伊弉諾尊伊弉册尊」云々の句に關する註解)

右の第一例は、本文の校異に關する問題であり、第二例は、それと共に、異本の問題に觸れて居り、これを一括すると、本文校訂に關する問題を取扱うてゐるのである。第一例は或る文字の位置の相違に關するもの、第二例は或る文字の有無に關するものである。此の例に於て、問者は「伊弉諾尊」の四字のない本を、異本として取扱ふべきかと、尋ねたのに對し、師說は、此の四字のない本は誤本であつて、異本とすべからざる事を説いてゐる。異本とは、かく兩本とも取用ひる事の出来る場合、即ち、兩立すべき本をば、底本に對して、他本を異本と稱するのである。一方が悪本である場合は、これを異本と云ふべきではなく、勿論、それは捨て去るべきものである。かやうに、諸本、異本の意義について、私記は明確な觀念を示してゐる。此所に至つて、1本文批評、2文字の音訓、3語句の註釋、4文化史的研究が具はつて來た。併し、訓點を附する事が、當時の研究では、最も重要であつた事は、假名文字の發明せられない時代の文學に對する研究として、致し方のない事である。それについて、語句の解釋が稍行はれ、他は極めて僅少なる程度に止まる。

二 和歌の研究

一方、萬葉集に於ても、その細註の中には、文學研究の萌芽を示すものがある。

第一に、語句の相違に關する問題は、編纂者が甚だ注意を拂つた所であつた。これは、和歌の如き一字一語に語感の微妙な相違を有する文學に於ては、特に重要な問題である。例へば、

天爾滿倭乎置而、青丹吉平山乎越或云藏見倭乎藏
青丹吉平山越而（卷一）

これは、諸本の校異、本文批評の問題にも關連を有する。左註に、「一書云」或本云」などと記して、作者や作時の相違のみでなく、語句の相違をも示してゐるのが、それである。（萬葉集の歌と全く同様の語句の相違に關する細註は、既に日本書紀の歌謠にも記されたものがある）。

第二に、文字の訓點に關する例は、

毎年爾……毎年爾之
等之乃波（卷十九）

第三に、語釋に關しては、

東風總給詔東風謂之
安胎之可也（卷十八）

第四に、最も注意すべき事は、歌詞の解釋と共に、主觀的な批判の加へられてゐる事である。卷十三に例を取ると、
今案、此反歌謂_二之於君不相者、於_レ理不_レ合也。宜言_二於妹不相_一也。

今案、不可言_二之因_一妹者、應_レ謂_二之緣_一君也。何則、反歌云_二三公之隨意_一焉。

の如く、歌の意味を論理的に考へて見た結果、歌詞の更改にまで思ひ及んでゐるのであつて、此所に藝術批判の觀賞的態度が、文學研究の一面として現れてゐるのである。史書の研究が、多く客觀的態度であるのに對し、文學作品の研究に、かく、主觀的觀賞の傾向を帯びて來るのも、當然である。それと同時に、自作、或ひは同時代の人々の作品を推蔽修正する所より、古文學に對する批判にも、その創作的經驗が及んで、主觀的態度を取るやうになるものと思はれる。最後に、歴史的、文化史的研究は、左註の中に數多く見られる。多く史書によつて、歌作の年時等を推定しようとするものである。

以上の如く、和歌の研究には、その研究態度に、史書の研究に見られた訓點の態度や註釋意識と共に、批判的態度、批評意識を伴つてゐる事が注意せられる。此の傾向は、平安朝時代に至つても、同様で、學問的要求と、藝術的要求との兩方面から、文學研究が起つてゐる。

第一の學問的要求の、文學研究は、萬葉集の研究が、その端緒となつてゐる。さうしてそれは訓點の態度の研究であり、同時に註釋的事業でもあつた。萬葉集の研究に於ては、正しい訓點を附すると云ふ事が、註釋の一つの目的であるとも考へられるからである。村上帝の天曆五年（一六一一）に、初めて、萬葉集を組織的に研究するの機會に恵まれた。此の年、宣旨があつて、和歌所が後宮の梨壺に置かれ、それは秀歌の撰出と云ふ藝術上の仕事を一つ目の目的としてゐたが、又、「古萬葉よみとき撰ばしめ給ふ」（源順集）事も、他の重要な目的であつた。召された人々は、清原元輔、紀時文、大中臣能宣、源順、坂上望城の五人。前者の目的に對する事業の成果は、後撰集の編纂となつて現れたが、後者の事業は、所謂萬葉集の古點として残された。十訓抄の傳へる所によると、此の五人が

萬葉集の研究に従事せしめられたのは、村上帝の竊姫廣幡の御息所の御勧めによると云ふ。源順は又、本邦に於ける百科辭典の祖とも云ふべき倭名類聚抄を編纂したが、これも、彼が延長年中（一五八三—一五九二）に第四公主（慶子内親王又は勳子内親王の御事と云ふ）の命によつて撰進する所と云ふ、女性の智識慾が、これらの學術的事業を促進せしめた事は、平安朝時代が、女性文化を社會的背景に持つ事と、密接な關係がある。

第二の藝術的方面の要求としては、歌合の流行と歌學の勃興とがあげられる。歌合は寛平時代に興隆した。これは、古今集の編纂にも、大いに關係があつて、紀貫之の古今集序文に見える文學論的態度、古今集の部類分に見られる、分類學的態度と共に、合せ考へられるべき事で、平安朝時代の和歌盛行の原因の一は歌合に存すると思はれるが、その晴れやかな行事は、創作に關心を有する人々に取つて、最も心が動かされる所であり、自己の名聲をあげ、社會的進出をする爲めに絶好の公開機關であつた。宮廷の貴族地下女房達の名譽心、競争心が此の一事にかけられた。それと共に、歌合の判者も、歌壇の有力者、權威者が選ばれたが、勝負の判定は、異常な判斷力と、充分の經驗學問智識を備へる事が必要であつた。勝負の理由として、古歌の典據をあげ、語句の使用の妥當、不當等を、衆人に肯定せしめる爲めには、なか／＼の才能を要する。かやうに、歌合に勝つ爲めに、或ひは、判者が審判の理由を得る爲め、又その理由を、智識階級の人々が正當に解し肯定し得る爲めには、和歌に對する全般的研究が必要となつて來た。古歌の研究が起り、萬葉集の研究が勃興したのも、かう云ふ所に一つの原因があると共に、語句の精密な解剖、その註釋的探究や、語法、修辭の研究が初めて行はれるに至つたのも、此の機運に乗じて生じたものである。此所に、藝術上の要求よりして、學問的研究が發展して來た。次に、その一例を示して見る。天徳四年内

裡歌合(一六二〇)は、後世の歌合の基準ともなつた、模範的な歌合であるが、その中に、

十六番 戀

左勝

朝忠

人傳にしらせてしがな隠れ沼の水籠りにのみ戀や渡らん

右

中務

むば玉の夜の夢だにまさしくは我が思ふ事を人に見せばや

左歌いをかし、つよき事なれど、さてもありなむや。右歌、むば玉とかけり。よるといふ事はぬば玉とぞいふかし。歌はおなじやうなれど、かきあやまちたるなめればそのよし奏すれば、あやまちあらむにはいかでかとおほせらる。仍以左爲し勝。

と見える。即ち「ぬば玉」を「むば玉」と詠んだ爲めに負となつた。従つて、かやうな語句に誤のなきやうに充分の研究を積まなければならなくなる。かう云ふ所に、文學研究の一因がある。かくて、平安朝末に、和歌の學問的研究が、俄然勃興して來た。源俊賴の俊秘抄、藤原仲實の綺語抄、藤原清輔の和歌初學抄や奥儀抄、或は、藤原範兼の和歌音蒙抄や古今集の教長註、又、藤原盛方の萬葉集註釋等の註釋書類に至るまで、數多くの書が出た。その中、綺語抄上卷には、次の如く記してゐる。

むばたま よるといふ またくろきをいふ

ぬばたま 奴婆珠 奴波多麻

うばたま 烏玉之夜 野干玉之よわたるかり

天徳歌合に、むばたまのよるの夢だにまさしくは我思ふことをと中務がよめる歌を小野宮左大臣判者にて、よるをばぬばたまこそいへとて、この歌をまけに判せられたり。今萬葉集にはむば玉といひて夜といひ、うば玉とても夜とよみ、又ぬば玉とてくろしといへば、わかぬこと葉にこそあめれ、などかく判せられたるにかありけん、又其時この證歌をおぼしさりけるにやあらん。

と見えて、前の天徳歌合の判定の根據を反駁してゐる。これは研究が進歩したからで、同時に、歌合と學問的研究との相關的關係をも察するに足るものである。

此の時代には、又、紀貫之の古今集序文によつて代表せられる、和歌の文學論的取扱方、歴史的態度、歌經標式以下の歌學の書に見られる、形態學的態度、分類的方法、評論的取扱方も、注意すべき重要な事項である。

平安朝時代の末に至つて、一大註釋學者が出た。釋顯昭がそれである。此の期の學問的研究の一つの成果が、此所に總收せられてゐるとも云ふ事が出来る。斯學は、此所に至つて、組織化され、體系化された。その著す所の書、萬葉集時代難事、柿本人麿朝臣勘文、古今序註、古今集註、拾遺抄註、後拾遺抄註、詞花集註、散木集註、日本紀歌註、袖中抄、六百番陳狀等、何れも有力なるもののみである。

彼の研究は、客觀的態度であつた事が注意せられる。第一に、諸本の異同を検して、本文批評を行ひ、權威ある本文につかんとした。第二に、諸種の材料を集め、諸註諸説を検討批判して、それより歸納的に結論を見出さんとする態度である。例へば、古今集註に於て、卷六に、

ユフサレバコロモデサムシミヨシノ、フカキノヤマニミユキフルラン

此歌、新院御本ニハタカキノ山トアリ、普通本ニモ此如。又萬葉云「ミヨシノ、タカキノ山ノ白雲ハユキハマカリテタナビキテミユ」然者タカキノ山トアルベキ歟。又萬葉歌云「ユフサレバ衣デサムシタカマツノ山ノ、ゴトニユキゾフルラシ」此歌相似歟。或本ニタカマノ山トカケリ、似事歟。タカマノ山ハ葛木也、吉野トツバクベカラズ。

とあつて、その理路整然たる客觀的態度を觀る事が出来る。此所に彼の研究の確實性が存する。その他の一面に於て、彼が自己の時代に近い歌集、云はゞ、現代文學を註解觀賞しようとしてゐる態度は、注目すべきである。尙古に片寄らず、近代文學を尊重するのは、文學に理解あるを示してゐるからである。

三 物語の研究

平安朝の末に起つた、他の注意すべき現象は、物語文學の研究である。從來の研究は大方和歌を對象としてゐたのに、此所に至つて、小説の領域にまで、研究の範圍が及んで來た。物語の隆盛時は、源氏物語を頂點とする、一條帝時代にあつたからして、それより可成りの歳月を経た、平安朝末期に至り、これを研究の對象とし始めたのである。

物語研究の初は、先づ、物語の内容を年代的に檢する、所謂、年立の研究となつて現れてゐる。且又これは、並の卷を判定する事によつて、物語全體の組織を研究する事にも關係がある。かやうな研究が早く現れてゐるのは、恐らく、平安朝の末に近く、歴史文學が勃興して、榮華物語その他の假名歴史物語が續々著述せられた機運に關連するものと思はれる。即ち、從來の寫實物語より、歴史物語を生じたが、歴史物語に於ては、年代的記述が最も重

要であるからして、此の點より、源氏物語等をも、年代的に組織を検討して見る必要が生じた爲めに、かう云ふ研究の機運が、先づ起つたのであらう。

續いて、諸本の研究より、本文の校異に及び、註釋的研究も、それと同時に、或ひは、それより稍先んじて、生じてゐる事、史書及び和歌の研究の場合と同一であつた。此の點の功勞者は、先づ藤原伊行が、次には、源光行、及び藤原定家の二人が、あげられなければならない。伊行の源氏釋、定家の奥入、光行の水原抄及び所謂河内本源氏物語等は、此の方面の研究の先驅者たる位置を保つ。河内本源氏物語は、本文批評、及びその校訂の事業に努力したもので、その結果、源氏物語の定本とも云ふべきものを作り上げたのが、此の書である。

註釋の事業は、徐々にして發達したものである。作品を読む時に、參考となるべき條項を、書入れる。その書が、もし卷子本なら、巻き展げながら讀んで行くと共に、又、端から、巻き收めて行くから、次第に裏面が右の手元近くに現れ、その本文の裏面に當る箇所に、註文を書入れる事が出来る。これを裏書とか、蔭書とか云ふ。又、冊子本なら、註文を、その冊子の最後に書きつけて行く。古代の冊子本は、所謂、胡蝶装であるから、これよりも後に行はれた袋綴とは違つて、大抵終に餘白が生じる。それでそこへ讀者の考へ得た所を備忘的に書き入れる事が出来るのである。これを奥入と云ふ。定家本伊勢物語や更科日記等に、その面影を見る事が出来る。同時に、本文の行間、欄外の餘白等にも、註文を書入れる。これらの勸物は、古事出典の詩歌文章、或ひは、有職故實の古例諸記、人物の傳記、行事の先例等を、假名書は原文のまま、その他は多く漢文で、書き入れるのが、普通である。字句の解釋にわたるものは殆どないと云つてよい。併し、中には、定家本伊勢物語の書入れに「くはこ」の句を註

して「桑子、蠶也」と記せるが如く、語句の註に關するものもあり、大鏡の裏書に「此大鏡、萬壽二年ノ物語也、伊賀前司之條、年紀相違、後見之人書加敷」と見える、成立に關する問題にふれたやうなものも稀にある。之等の註記は、決して、一個人が、一時に書きつけたものではなく、讀者の手を經、書寫を重ねるに従つて、次第に増加してゆくのである。それと共に、漢文的傾向、引用文の原文主義の傾向から、次第に、假名文で註を書入れる傾向に變じて來る。又、單なる出典や故實のやうな書入のみではなく、語釋、句の續き具合のやうな、内容の精神に觸れた解釋へと進んで來、或は、批評的言辭をも弄するやうな、批判的傾向へと進んで來たのである。註の文章が長くなる事も、それに伴つてゐる。大鏡の裏書に「助教師安加筆」或は「師安加筆」などと記されてゐる部分は、他の註記よりも後の書入で、寛平遺誠の記憶を、大鏡を讀みつつある間に、連想して、思ひ起すままに、註書を書入れたものである。更に進んで、原文に紛はしい筆致をもつて、原文の補足的な事項を書入れた。それが、遂に本文に紛れ入つては、大鏡の内容の量を増す原因ともなつた。此所に至つては、註は既に、文學的效果をさへ持つ文章となつてゐる。或ひは、奥入について見ると、この書は、伊行の源氏釋を増補したものであるが、源氏釋は、恐らく、物語の本文の書入の體裁になつてゐたものと思はれる。その奥入の中には、源氏釋に關して「伊行尺不相叶可_レ勸_レ之」と批判を加へた所も見え、又「注加」或は「書加」などと、後の増補なる事を明かにした所もある。定家本伊勢物語の書入には「陸奥むつのしのぶもぢずり」の歌に關して「河原大臣歌也。左大臣源融寛平七年八月薨なほ七十三。於_二在中將_一非_二幾先達_一如何」と云ふやうな、批判的言辭を弄し、或は、芹川行幸の條に關して「或本不可_レ有_レ之云々。多本皆載_レ之。不可_レ止」と云ふやうな、本文批評に對する、定家の意見を掲げた箇所も存する。併し、これを

大概に云へば、上述の、出典、故實と人物の傳記等に終始する態度が、註釋の原始的な態度として、一貫してゐる。これらの書入の註記は、後に抄出せられて、一書とせられる。源氏釋、奥入の如きは、何れもさうであつたらう。大鏡裏書の如き、又その一である。それらは抄出者の異なるに従ひ、或は書寫の状態の異なるに従ひ、條項の數や、順序や、文章それ自身にも相違が生じて来る。故に上記の書には少くとも二種の甚だ異なる異本が傳へられる。(此の點奥入よりも裏書の方が殊に甚しい)。かやうにして、註釋は、一個の書籍にまで進展し、次第に詳しく長く、且つ、書入の不自由さから開放せられて、範圍も廣く、自由な態度の註釋へと發展して來たものである。それと共に、註釋家の人物について見ても、定家の古典研究に至つては、歌集は云ふまでもなく、物語日記草子類にまで及んでゐて、綜合的に、且つ、考證的客觀的態度をもつて、研究を試み、その、後代に大なる恩惠を垂れてゐる事は尠少でない。鎌倉室町時代に於ける歌學は勿論、古典研究、本文批評、註釋等、すべて、定家より出てゐると云つても、過言ではないのである。この他に、源光行を祖とする一流も、別に重要な地位を占める。

二條家の定家は、六條家の人々と争つた。六條家の顯昭は、六百番歌合に於て、判者たる藤原俊成の裁定に服せず、六百番陳狀を記して、俊成の批評に反駁を加へたが、俊成の子定家は、顯昭の古今集註の説を駁して、顯註密勘を著した。此所に至つて、兩家の争は、一層感情的に深くなつた感がある。併し、顯昭が、平安朝の研究の總集的位置を保つ學者として、此の期の末に現れた、偉大なる註釋學者とするならば、定家は中世の學問の緒口を開いた、材料の供給者、研究の暗示の提供者として、重要な位置を保持してゐるのである。従つて、顯昭は深く、堅實で、一つの學風の完成を示してゐる。定家は、淺く廣く、且つ暗示的で、大きい未完成的存在である。中世の文學

研究は、彼より發展してゐる。

四 中世の日本文學研究

中世の文學研究は、鎌倉時代の萬葉集研究に於ける仙覺に一つの頂點を示し、室町時代となつては、物語研究が盛んとなつて、一條兼良に、その包括的完成的な存在を觀る。併し、中世の研究的态度は、細川幽齋をも、一つの頂點的な存在とする事が出来るのであつて、要するに、兼良より幽齋に至る線に、その活潑な存在がある。その間に、逍遙院實隆や宗祇の如き重要な人物も點綴せられる。さうして、北村季吟に至り、眞の中世的研究の總集綜括と見なされる、最後の學者が見られると共に、その研究は鋭い光芒を失つて、遂に中世の文學研究は、次の近世的復古精神の研究へと席を譲る事になる。

六條家と二條家との争ひは、六條家既に没落して人なく、二條家の門流は、その支流である、京極冷泉家と相争ふに至つた。かつての六條家對二條家の争ひは、前者が主智的な學問研究の態度であり、それ丈け藝術に對して、理智的常識的であつたに對して、後者は、藝術至上主義で、情熱的であつた。即ち、智識對藝術の争ひであつたが、今の二條家對京極冷泉家の争ひも同様で、此の場合、二條家は、智的態度であり、京極冷泉家は藝術派の態度であつた。京極冷泉家では、二條家の祖、俊成定家の主張を襲うてゐるのである。しかも、二條家では、定家の一面なる古典研究の智的態度を特に強張して、自家の態度とした。さうして、一般には、その常識的態度が理解し易いので歡迎せられて勢力があつたが、實質上には、京極冷泉家の藝術派に及ぶべくもなかつた。此の兩派の争ひが、多

くの偽書を生じ、定家作と云ふ種々の疑問の書を生んだ。又、古典に對する、それ／＼の證本をも異にするに至つた。例へば、二條家では、古今集の貞應本（一八八三）、即ち今日の流布本を使用し、冷泉家では嘉祿本（一八八六）を用ひたらしい。定家の子爲家には、萬葉集佳詞、又、古今集、後撰集の註書等があつたが、その研究上の氣力も薄く、根據も脆弱で、見るべき業績はない。最早、政争に結びついて醜い争ひを事とする、堂上歌學や、貴族の學問には、到底權威ある學說や研究が現れる筈はない。寧ろ、公卿學者以外の、神道家僧侶の如き宗教家の間から、立派な研究が現れた。それは、此の時代の文化的勢力を、さう云ふ宗教家が占めてゐた、時代の狀勢に伴ひ、社會的背景を負うてゐるのである。

ト部兼文は古事記に裏書を註記し、（これは「古事記裏書注之」「古事記上卷ノ裏書云」などと題してゐて、前に述べた裏書の抄出の形式を明に留めてゐる）、その子ト部兼方の釋日本紀に至つては、從來の日本書紀の諸註を大成し、別に新見識を示して、一新機軸を出したものの。文字の音訓、諸本の異同、語意の釋義、進んで歴史的事實、典故實の考證等に及んでゐる點は、從來の史書の研究の態度と同様であるが、老なる卷數と、諸説の網羅集成に、型態上、二つの完成的な時期を示す功勞がある。併し、釋仙覺の萬葉集註釋に見られる、精到さには未だ及ばない。

仙覺は幼少より萬葉研究に志して、十三の年から四十餘の年まで、三十年間志を此の事に向けた。寛元三年（一九〇六）頃より將軍家の保護によつて、萬葉集の諸本を搜索探究する便宜を得、寛元四年には、從來訓點のない歌百五十二首を抄出して、これに新に訓を附した、これが即ち新點である。此の頃に、彼は萬葉集の校本を作つて、その文字の異同を検討する事により、正確なる訓へ到達しようとしたのである。併し、その後も研究を怠らず、進歩し

た新しい智識により、文永二年（一九二五）に第二回の校本を作つたが、此の本は將軍宗尊親王に奉つたので、翌三年に又一本を書寫した。これが今日傳へられる仙覺本萬葉集で、世に流布する萬葉集は、すべてこれから出てゐる。仙覺本萬葉集は、此の長い研究と諸本の校訂の結果、世に現れたもので、最も權威的な書と云ふ事が出来る。彼はこれに附した訓點を色分にした。墨は舊訓、青は舊訓を仙覺が改訓したもの、朱は仙覺の新點である。又、歌の頭にも、朱の圈點を附する事によつて長歌を標し、青の圈點を附する事によつて旋頭歌を標する等の用意を忘れなかつた。墨によつて在來の型態を、朱青色によつて、自説を現さうとしたもので、實に細かく注意が行き届いてゐる點は、仙覺の學問上の用意の周到なるものを思はせる。かやうな正確なる研究の結果、萬葉集の定本を作製して、文永六年には、此の定本の萬葉集より、難解歌を抄出し、これに可成り詳しい註釋を施した。萬葉集註釋、即ち普通に仙覺抄と云はれるものがこれである。萬葉集の眞の價値ある註釋は、これを始とする。その中には、舊訓を批判し、彼の定めた改訓新訓の理論根據の説述されてゐる所も數多く見出される。その注意すべき事項をあげて見ると、1 本文の漢字と訓とが果してよく一致するや否や。2 舊訓によつて果して歌意が明確に了解出来るかどうか。3 語の用例が他にあるかどうか。4 歌として調子がよいかどうか等である。例へば、1 の問題については、卷二の「秋山に」の歌に關し、その第四句「勿散亂會」の字に對して、古點では「ちりなみだれそ」と訓んでゐるが、仙覺は「古點ちりなみだれそと云べくば、一云知里勿亂會と註すべからず。しかれば、是は、なちりみだれそとよむべき也。かはることなくば、註に一云ちりなみだれそと云べからざるが故也」と記し、4 の問題については、卷三の「しかのあまは」の歌の第四句「髮梳乃小櫛」について、「此の歌第四句、古點には、かみけづりのをぐしと點す。その

和いたくながし。これをくじらのをぐしと和すべし」と云つてゐるが如き例である。次に註釋の態度としては、音韻相通論をしばしば説いてゐる。これは江戸時代の新しい國學者にまで遙に影響を與へた。2言惣意別と云ふ事を云つた。言葉は同じくても、用ひる箇所によつて意味が異なつて來ると云ふのである。これは歌詞の細かい味讀を意味してゐる。3特に重要なのは、從來、語句の斷片的な出典故事の註解にとどまつてゐたのが、歌全體の意味の把握に進んで來た事で、一首の歌意を明確に了解し、作品を觀賞する爲めには、重要な進歩である。4諸種の典籍の引用によつて、考證的態度を取つてゐる事、これも從來の如く、たゞ原文の例示のみにとどまらず、註者の理論根據、批判的態度が示されて、一々理由が加へられてゐる。萬葉集の成立の問題を論じ、研究の方法の問題に於いてゐる事も、すぐれた論考として、以前の註釋的研究に見られない、獨創的で、且つ進歩した態度がある。併し缺點も少くない。1地理的知識の缺乏、2歴史的變遷を考へず、3牽強附會の考へ方を免れず、4文法的觀念の正確が主なるものとしてあげられる。仙覺について、由阿の名も、萬葉學者としてあげておく必要があらう。

源氏物語の研究も、絶えず行はれて、水原抄、原中最秘抄、紫明抄の如き註釋書が出たが、その古事出典を主とする態度は、奥入をさう離れたものではない。たゞ語句の解釋が多くなり、且つ註解が可成り精密になつてゐるのは一發展である。就中、河海抄卷五に引用する所によると、水原抄は「大方の秋の別も悲しきに」の歌について、「源氏二首つゞけてよみ給ふに御息所の返歌なき如何」と云ふやうな、内容に關する批評の言なども含んでゐる點は、註釋態度に大きい進歩を見る。併し、源氏物語の研究は、四辻善成の河海抄に至つて完成の一時期が劃される。成立の問題にふれ、註解の詳細なる點に至つては、從來觀ざるものである。その態度に至つては、從來の源氏

釋、奥入等から發歴した、考證的客觀的態度を離れるものではなく、引據出典をあぐる事愈々詳密、寧ろ煩雜に流れた所さへ見られる。一面に於て、水原、紫明、その他古來の註を集成した感もあつて、此所にも一つの完成的功果を觀る。特に、此の書に至つて、語句の假名書に漢字をあてて意を示す事が盛んとなり、或は日本書紀等の古訓を例示する事によつて、語句の解釋に資しようとする態度が多い。これは、紫明抄等にも既に少數見られた所であるが、河海抄や、これと時を同じうする、仙源抄、或ひは善成の聞書なる千鳥抄等に見られる著しい現象である。此の風は自後の舊註に大きい影響を及ぼした。しかも、その典據に誤があり、或ひは、その擧げてゐる典籍に、例示された所の文字や訓の發見出來ないやうな例が多くあるにも關はらず、前書後書受けついで、舊註には何らこれを訂正するものなく、新註の勃興まで、此の態度が盲襲せられてゐたのである。

鎌倉時代に沈滞してゐた堂上公卿の學者は、室町時代に至つて、政争より離れて、その閑暇と、學問研究に恵まれた環境より、すぐれた研究業績を出すに至つた。善成の如きは、その先驅者であるが、一條兼良に至つて、學界の中心人物とも云ふべき偉大な存在を見る。その著は花鳥餘情、伊勢物語愚見抄、古今集童蒙抄、日本書紀纂疏、樂塵愚案抄等、あらゆる方面の研究に及んでゐる。その學識は、内典外典、儒教思想佛教思想までも極めた。従つて考證學には最も合適な博學者であり、精勵恪勤亦學者にふさはしい風格があつた。花鳥餘情は、その代表的著述であるが、河海抄の態度を多く出るものではなく、時としては、同書卷廿七にある、六條院が入道宮に「きんのふ二卷」を奉つた事をもつて、「天曆三年右大臣捧先皇賜動子内親王二筆譜三卷」と云々なる典據を記し、「これによりて、延喜の動子内親王にたまはせ給へる筆譜をたてまつり給し事を、今の物語に六條院の女三宮にたてまつり給し

琴の譜にかきなせるなり。河海等の諸抄にもみえざることなり」と誇つても、それは準據の説明に、煩雜な一資料を加へたにとゞまり、作品の中心構想の解釋にも、語句の解釋にすらも、何らの足しになるものではない。寧ろ、彼の註釋書としては、伊勢物語愚見抄の方が、すぐれてゐる。なぜなら、それは、此の物語に對する從來の典據考證の態度を離れて、語句の註釋を主とし、長い文章を全體的に解釋しようとし、或ひは文章の裏面にひそんでゐる、精神を読み取らうとした、進んだ態度が見られるからである。例へば、「男ちかうありけり」の句を解釋して、「女のはしちかなるをいふ。男におそれぬ心なり」などと云ふ、心理的解釋にまで進んでゐるのが、それである。梁塵愚案抄などにも、断片的な語句の解釋に終らず、一書を全體的に擷まうと云ふ心持が見られる。つまり、對象の精神に肉迫しようとするのである。これが彼の研究態度に生命を與へてゐる。勿論解釋に誤謬の多い事を免れなかつたのは、未だ國語意識の淺く、語法觀念の不正確な時代の事とて、致し方のない現象である。三條西實隆、飛鳥井榮雅の如き歌人、學者、或ひは、宗祇、猪苗代兼載等をもつて代表せられる連歌師の、萬葉、古今、伊勢、源氏等の研究も、それ／＼可成りの業績を残してゐる。細川幽齋は學問の方に於ても指導的位置にあつた。彼の奥書を持つ古寫本、傳書の類は數が多い。併し、實際の研究業績としては、伊勢物語闕疑抄の如き纏まつた著書は極めて僅少で、中院通勝をして、岷江入楚の如き大著を完成せしめたのが著しい功跡である。通勝も亦一代の學匠として、堂上方に珍しい識見と霸氣とを有し、也足史素念（通勝の號）の奥書識語を持つ寫本、研究書類も亦少くない。源氏の他、竹取、伊勢等に及び、伊勢物語聞書や徒然草壽命院抄等、その功によつて今日に傳へられた書も數多く散見する。就中、慶長年中、所謂嵯峨本の開板に参加して、古典の普及に努力した事は、彼の没すべからざる

文化的功績である。

室町時代の作品研究が、全體を掴まうとする態度であつたことは、梗概書の頻出によつても、これを知る事が出来る。源氏小鏡(藤原長親)、源氏物語提要(今川範政)、源氏大鏡の如き名著は、何れも此の時代に現れた。尤も、源氏小鏡の如きは、連歌の歌詞やその附合の研究上に、源氏物語に通曉する必要があつたから、その爲めの作法書としての性質が、内容の中に多分に存し、至る所に連歌に關する注意が加へられてゐる事は注意すべきである。夜半の寢覺の梗概書、狭衣物語の作り替等、多く、此の時代の作爲であらう。逍遙院實隆、及びその教を受けた門流や、連歌師等によつて、狭衣下紐や年立や狭衣文談、鈔の類の、狭衣物語の研究が新しく著手せられ、枕草子も次第に注意を引くなど、研究の方法も、對象の範圍も、次第に廣汎となつて來た。仙源抄の如き、萬葉見安の如き、辭書的研究も起り、又、辭書の研究と平行すべき索引目錄の研究、分類的研究も亦和歌の側に於て著しい。尤も、萬葉集の分類的研究は、早く平安朝末に、類聚古集、古葉畧類聚抄の如きがあつたが、此の時代に至り、中御門宣胤の萬葉類葉抄の如きが現れ、更に、八代集の分類研究にも、着手せられたものがあり、一方、勅撰作者部類の如き、索引をかねた作家人名辭典式の書も出た。或は、源氏や狭衣の詳密な系圖、年立等、内容的研究の成果が、續々と出で、これは何れも、一條兼良や三條西實隆の如き碩學によつて、進められた所、その全般的總體的研究の進出が著しい。又、無名草子や源氏解等に見られる、物語の批評的文學論的研究も、中世の物語研究の顯著なる特徴としてあげなければならぬ。

江戸時代に入つて、舊註より出でた研究者の中でも、徒然草の註釋(奈佐美草)の著ある松永貞徳、源氏綱目や源

義辨引抄の著ある一華堂切臨、枕草子の研究者、加藤盤齋、岡西惟中等注意すべきものが少くなく、連歌、和歌、俳諧の参考書として、古典を研究すると云ふ態度は、舊註に共通の傾向として、此の當時にもなほ残存してゐたが、特に、加藤盤齋の枕草子抄に至つては、その考證的研究、舊說打破の態度、章段の分類によつて内容を確實に把握せんとする方法、或ひは、「なりゆく山ぎはとうつる文體奇妙也」と記したやうな觀賞的態度等、新註と云つても少しも差支へないやうな特色が見られて、たゞ、師承傳統上貞徳門の彼を舊派に置くとしても、此の時既に、新研究の起る機運、素地は充分に出来てゐたのである。岡西惟中の清少納言枕草子傍註は、舊來の考證的態度で舊套を襲うてゐるが、傍註によるセンテンスに注意した解釋は同時代の北村季吟の方法と同一であり、就中、圖解による可視的直覺的解釋の先驅として、注意するに足る。

此の時代に、特に注意すべきは、皇室に學問の御研究の盛んとなつた事である。至尊の御身の上でも、早く、平安朝末に、歌學に關する百科辭書とも云ふべき八雲御抄を著された順徳院、南北朝時代には、源氏辭書の嚆矢仙源抄の名著を著された長慶院の如き方々があらせられたが、江戸時代に入つては、後陽成院に伊勢物語愚案抄、後水尾院に、伊勢物語勅講抄、源氏の註布勢屋乃塵等の御著あり、又、源氏文字ぐさりも、兩帝の御撰と云ひ、後西院帝、靈元帝も好學の御心があつて、古典の講述に心を傾けられた帝が代々續いて出で給うたのは、最も著しい事である。八條宮智仁親王の御名も、近世に於ける宮廷歌學の祖として、記しておく必要がある。

最後に北村季吟が来る。その諸註諸説の集成的態度、廣汎なる研究範圍、濫りに私説を差挿まない溫和な常識的態度、古典を平易に了解し易く普及せしめようと云ふ教育的態度、しかも、連歌師として、研究を歌作に利用する

事をも忘れない功利的態度等、一として、舊派的研究の圓熟老成したるを示さないものはない。その子孫より、梗概書源氏物語忍草の著者北村湖春や、系圖年表の書源氏物語董草の著者北村久備が出たのも、此の舊派の態度の延長であつて、梗概、年立系圖は、既に室町時代にも充分研究せられてゐた事である。それが、此の一家の集成的手腕によつて、極めて手際よくまとめ上げられた。故に、北村季吟の等身の撰述と共に、舊註より出でた書としては、最も便利な良書として、世に推稱せられる所以である。併し、舊封建時代の事大主義と共に、長い傳統を持つ常識的な温和な理智的態度は最早捨てられてよい。若々しい熱情と意氣とを持つ、町人の自由な學問が、新しく生れて來るべき時運に際會してゐた。すべての傳統を破り、舊説の師承主義に反抗すべきであつた。時は元祿時代である。

五 近世の日本文學研究

近世の學問も、發足點に於ては、舊時代の學問と軌を一にしてゐた。第一に、それは歌學の補助として發達したものである。歌道の舊破的態度を打破し、萬葉主義に歸る手段として、古典の再檢討が行はれた。これが近世の學問を發達させた一因である。第二に、舊時代の學問は、典據引用を主として、考證的客觀的態度であつた。此の點に於ても、近世の學問の研究方法は同一であつた。たゞ、舊時代よりも新資料の發見によつて、材料の豊富なると思考の方法の精緻なると、それらの點よりして一層結論が確實となり、研究の態度も純一となり、學術的に一層の進歩を見せたのである。

此の點に於て、中世の學問の最高峯、仙覺に類する態度を、近世の學問の初頭に當つて、契沖に認められる。彼は、その研究の多方面なる所に、先づ傑れた力量を發揮してゐる。萬葉代匠記を主著として、記紀歌謠より、伊勢、源氏、古今等の歌集、神樂催馬樂の類までに及ぶ。何れも、註釋、研究の何らかの業績を残してゐる。彼の強味は、本邦の古典、漢籍に通じたるは云ふまでもなく、僧侶として、佛學と共に、悉曇音韻の學にも通じてゐた事これである。萬葉代匠記總釋(精撰本)の「集中假名ノ事」の條項に、その悉曇の智識は詳細に述べられてゐて、そこに掲げられた、五十音圖は「梵文ノ法ニ准ラヘテ、和字ヲモテ五十音ノ様ヲ圖」したものであり、和字正濫抄の五十音圖が「右の圖梵文に準らへて作」られたのと同様である。これは、合成文字なる假名文字を、更に、發音的に音韻を精細に考へる事が出來、同じ僧侶の出として、悉曇の智識があつた仙覺に既に見えてゐた音韻相通論が、一層精緻となつて、學術的に應用する基礎がそこに築かれてゐるのである。即ち、歴史假名遣が、此の基礎の上に立つて確立せられたのは、學術上に於ける彼の偉大なる功績である。更に、智識の範圍が廣くなり、資料蒐集の數の増加によつて、歸納的研究が、一層學術的な正確に近づいてゐる事は、次の比較によつて明かである。萬葉集の書名の説明に關して、仙覺は「よろづのことの葉」の義として、引く所僅に毛詩序、古今集真名序、及び假名序に過ぎないが、それは萬葉の語を解する資料としては薄弱なものばかりである。従つて、これから、決定的な解釋を期待する事は出來ない。契沖に至つては、萬は物の多い義として、史記、左傳、莊子等を引き、葉の義には、二つありとし、一は葉は世の意として、毛萋の詩傳、文選の左太仲の吳都賦、劉琨の勸進表、顏延年の赭白馬賦、同じく曲水賦、合義解、古語拾遺、元享釋書に至るまでを引き、二に、葉は歌の意として、釋名を引いた。何れも用例として適確

であり、問題の焦點に當つてゐると共に、個々の文字の意について考へたのは、分類の詳しい事を思はせる。今日此の語が萬世の意と確定せられた如きは、既に契沖の豊富な引例にその惠澤が存するのである。本文批評に於て、仙覺の見なかつた豊富な諸本の検討により、正確な訓點を得て、仙覺の誤を正し、足らざるを補つた例は多々存する。契沖の此の事物を詳細に分けて思考する方法は、その著書の各方面に見られるが、萬葉代匠記總釋（精撰本）に、歌數、作者、地儀、天象詞類、詠人名歌類、神代類詞大概、仙家詞類、釋教類詞、儒教歌類、有老莊之趣、歌類、非常者詠歌類、屬禁裏詞類、人倫、鳥獸蟲魚、草木、衣服器財等類、漁獵詞類、舍宅詞類、田家詞、器材類、車類、馬類、牛類、有罵詈詞類、名與物歌類、地名、枕詞等詳細に分つて、或部分は伊呂波分となし、その出典の丁數、語例をあげて極めて詳細なる分類を試みてゐるのは、前人未發の研究であると共に、後代に至大なる影響を與へてゐる所で、後の此の種の研究は契沖に起ると云つて差支へなく、萬葉集古義の附録の如き、契沖の此の研究より出てゐる事は否まれない。或ひは、釋教、儒教、老莊の如き思想方面にまでもわたり、凡そ萬葉學上、分類的に考へられる諸種の問題を掲げて典據を示してゐる所は、その分類學、或は形態學上に精緻無類の思考力が見られる。

かやうに引例の豊富確實な事、分類的思考の詳しい事に加へて、水戸光圀の保護のもとに、諸本校訂の精密なる事業をなして、偉大なる學術上の成果を収め得たのであつた。それはひとり萬葉集のみならず、物語日記歌集等、中世以前の文學のあらゆる方面に及んでゐる。夫木和歌抄の錯亂の批判の如き、彼によつて始めて考へられた所で、その材料の廣範圍なのは、かつて見ざる盛觀である。要するに客觀的歸納的研究としては、近世の文學研究中、最も偉大なる存在である。此所に至つて、研究方法は、舊來の徒らなる舊說繼承の因習的態度を打破し、原

典依據、新説確立の旗幟のもとに、一大回轉を試みた。古典に復歸し、原文に直接について考へる事によつて、後代の誤つた考へ方を是正しようとするのである。彼の先輩下河邊長流は、契沖に暗示的感化を與へたが、暗示以上の大きい業績は認められない。併し、此所に至つて、最早舊時代の研究は全く光明を失ひ、此の新しい太陽のもとに古典の研究は一新せられた。爾後は、たゞ契沖の感化のもとに、研究の進歩が促されたのである。此所に復古精神の國學、新文化主義の學問が發祥した。

併し、契沖の感化のもとに立つた、偉大なる學者、荷田春滿に至つては、その文化的な復古精神には契沖と何ら異なる所なく、寧ろその點は甚だ急進的となつて、宗教的な信仰にまで發達する傾向を見せてゐるが、外貌には一見異なる外觀を呈した。殊に著しきは、その主觀的態度である。例へば萬葉集の讀法に關して、彼は自家の考へ及ぶ種々なる訓方を出したが、それは決して確實なる傍證あるものでなく、常識的に或は經驗的に考へ及ぶ思ひ付きを述べたものに過ぎない。その中には、獨創自由の新國學を誤解した結果、餘りに奔放な奇矯に走せた訓も多く存して、主觀主義の弊害に墮してゐる。しかも、萬葉集備案抄に「みくさかる荒野にはあれど」の歌を解して「僻案は、葉の字の上黄の字有しを、轉寫の時失へるなるべし」と云つて、契沖の發明の説をそのまま盗用してゐるが如きは、考證的歸能的思考力の、彼に缺乏してゐるのを示すものであるが、一面、同じ時の「東の野に陽炎の立つ見えて」の歌を解して「此夜月の夜とみえたれば、あくるもしらず打ながめたるに、烟をみて明がたをしりて、かへり見せられたるさま、あほれかぎりなし」と歌の情緒を評したるは、彼の主觀的情緒的態度を見る事が出来る。要するに、彼は單なる書齋派的な學者ではなくして、實行家教育者であつた。伊勢物語童子問や萬葉集童子問に見え

る啓蒙的態度、同じく僻案抄にも見える或問の問答的方法は、此の實行家としての解釋方法であつた。これは、舊時代に、日本紀私記を始めとして仙覺の註にも既に取られてゐた所の、學術普及には便利な註釋上の教育的方法であつた。これを春滿は利用したのである。此の點に於ては一面舊時代へ逆行する危険性がある。だが新時代の研究は自由で固定的でない所にある。彼は此の新精神を體驗してゐたから、舊時代の註釋の長所を新しく生かして、自己の實行的方法の補助とした。契沖の如き書齋的學者のみでは、社會に力強く新時代の研究の勢力を伸長する事が出来ない。その證據には、契沖の門弟として數へられる學者は、若沖、今井似閑等甚だ少數に過ぎない。春滿に至つて、新時代の研究が長足に勢力を發展せしめたのである。彼が漢學に對抗する爲の、國學校の創立を企圖して運動に盡力した事は、その實行家教育家としての面目を最もよく顯してゐる。

彼の主觀的傾向は、賀茂眞淵によつて、繼承せられた。たゞ春滿程矯激でなく、學術的な正統主義に立歸つてゐる所に進歩が見られ、又春滿よりも價值ある所以である。その研究の領域の廣大なる事は、契沖に匹敵するものがある。併し、研究の態度に至つては、全く契沖とは反對で、彼に對して、これは主觀的演繹的態度を取つてゐる。一の信念があつて、その信念より、研究が導き出される。従つて眞淵の研究態度は、實證的でなく、觀念的である。彼の信念と云ふのは、五意考の中に明瞭に示されてゐる。「唐國の學びは、其始人の心もて、作れるものなれば、氣々にたばかり有て、心得安し。我すべら御國の、古への道は、天地のまに／＼丸く平らかにして、人の心詞に、いひつくしがたければ、後の人、知えがたし」(國意考)。漢學に對する古道、これが彼の信念である。それは、天然自然の道である。繁纏を厭ふ簡明主義である。理屈よりも直觀を貴ぶ。儀禮を排し、素直なる眞心、誠を基調とする。

従つて、その道は、自然に會得すべく、典據引例等による仰山な説明を事とすべきものではない。かやうにして、古道の體得には古典の研究をもつて最も重要であるとしたが、併しその説明は、契沖の如く、考證主義を事とするのではない。反對に、自己の古道に對する信念を披瀝する事により、讀者の自然なる會得を俟つより他はない。萬葉考の別記に於て、萬葉集の卷序を古きものより新しきものへと變更したが、その新古の差別に、客觀的な例證があるわけではない。古歌の精神を體得する事により、自然に、これが了解せられるものとなし、自己と同じ體驗を會得した者のみが、自然に到る境地であつて、それ以外の未熟者が、これを直觀的に悟する事が出来ないのも、致し方がない事として、あへて説明をさし挿まなかつたのである。勿論、考證説明を排除したわけではない。學術の探究には、これをも必要として、冠辭考の如き、學術的價值高き書は此の考證主義の上に立つてゐる。たゞそれは參考補助として用ひられただけで、根本は直觀主義より出でゐるのである。

眞淵の古道主義を従とし、契沖の客觀歸納的研究を主として、偉大なる業績を完成したのが、本居宣長であり、眞淵の古道主義を極端に宣揚して、宗教的の信念を樹立したのが平田篤胤である。宣長の畢世の大著、古事記傳は、學術研究の粹をつくしたもので、規模の雄大、學識の該博、考證の精緻、思考の綿密なるに至るまで、一も間然する所がない。諸本の校訂は云ふまでもなく、古典を縦横に引用し來つて、正確なる語句の解釋、思想的解明までも施した。それは單なる古事記の註釋にとどまらず、あらゆる古典研究の參考書として、凡そ古典研究のふれるべき領域、大小の問題に、大概はふれてゐるのである。萬葉集の研究にも、平安朝文學の研究にも、この書を甚だ必要とする。しかも注意すべきは、その中に流れてゐる主觀的信念、宗教的な古道主義の觀念である。源氏物語研究の

名著玉の小櫛に於て、此の物語の成立の問題を解明し、本文の校異を掲げ、語句の註解に及んだ他、文學觀賞の説
明に、多くの紙數を費した所にも、彼が、單に、書齋的な學術研究にとどまらず、文學研究の眞意義を廣く傳へよ
うとした努力が認められる。新古今集遠鏡の如き、啓蒙的な著述は、特に、その意味で重要である。たと誤解せら
れてはならない事は、その啓蒙的なと云ふ意味が、安易な研究、識見の低さを表すものであつてはならない。宣長
の如く深い根柢を持つ學力があつて、始めて啓蒙的な事に意義が生じる。萬葉集玉の小櫛に於ては、例證もあけず
に、簡単に、萬葉集の語句に對する自己の意見を述べて、從來の説と異なる點を注意したが、その直觀的な言ひ方
が、少しも危懼の念を伴ふ事なく、實際に於て、確實な解釋であるものが多いのも、彼の根柢ある學識の賜物であ
る。かやうに、春滿以來の實行的な方面、古典文學研究を一般大衆に廣めると云ふ方面に於ても、彼は、春滿眞淵
に劣るものではないが、しかも、彼の學者的天性は、結局、繁纏とも見られる、考證主義の方に主なる傾向を取つ
た。此の點に於て、彼は契沖の研究態度の延長であり、事實、語學的研究に於て、契沖の説を是正し得たのも、(契沖
が、ア行のヲ、ヰ行のオと誤つてゐたのを、宣長は字音假字用格に於て正してゐる。眞淵には純粹に語學的な著述
はない。語意考が、その傾向を有するのみ)、或ひは契沖の代匠記に對する古事記傳の如き主著を有する事も、(眞淵
の萬葉考の如きは、これに匹敵するだけの力量がなく、彼の著書の中でも、代匠記や古事記傳の如き地位を保つ事
が出来ない)、或ひは、宣長に新古今集や草庵集の註解がある事は、契沖に、新勅撰集、夫木抄等の註解研究あるに
當り、宣長の玉勝間は、契沖の河社に當る、學者的考證隨筆中の尤なるもの、(眞淵には、さう云つた著書がない)、
その研究の範圍、態度、方法等、實に兩者類似するものがある。宣長が、萬葉集の卷次を、その型態、或ひは客觀

的證例をあげる事によつて、考へんとした（萬葉集重載歌及び卷の次第）のに對し、眞淵がその古歌の精神を忘れたる點を叱責したのも、兩者の個性の相違、従つて學術研究の態度に對する相違がもたらした結果である。主觀主義と客觀主義との相違である。故に、眞淵の古道主義の觀念論の立場に對して、宣長は、客觀的歴史主義の立場から、文學的變遷に着眼し、眞淵の萬葉主義に反對して、新古今主義をとへるに至つたのも、此の立場の相違からであつて、まことにやむを得ぬ次第である。

眞淵の立場を最も極端に押し進めたのは、平田篤胤であつた。彼は遂に古道主義より平田神道の如き、宗教哲學を樹立するに至つた。彼の著書に宗教的著述が多いのもその爲めである。實に、彼は、春滿以來の熱烈な復古精神を完全に確立した人と云うてよい。さうして、その主觀的觀念論は、古道主義を守る立場より、神代文字の存在を主張し、遂には事實を歪曲した報告をあへてするまでに、極端に非學術的な態度をもつて、政治的策畧を弄するやうな事にまで至つた（神字日文傳）。これが、濃厚な學者的な考證主義の伴信友から、論駁排撃せられた所以である（假名の本末）。併し、彼は伊勢物語や、神樂歌等の註解をなし、研究の範圍も可成り廣かつたが、要するにその極端な觀念論は、學術書として多くの價値を有しない。たゞ古史傳は、彼の主著として、宣長の古事記傳に對抗するものであるが、古代の史書を綜合包括して、自己流の一書を作り上げ、これに詳しい註解を施した。原典をそのままに尊重するなど云ふやうな事は、彼には到底望まれぬ事であり、たゞ、その總集的態度に、一の特徴があると共に、従來の諸説を検討し引用して、包容的研究を試みる態度は、既に近世の研究が潑刺たる新進の態度より、漸く老巧圓熟の境に向つたものとして、末期的現象を示すものである。篤胤の態度は、その門弟鈴木重胤の日本書紀

傳や、祝詞講義に至つて、一層老大な包括綜合的研究に向ひ、寧ろ煩雜に過ぎてゐる。しかも重胤は、篤篤に劣らぬ神道家であつた。とにかく篤胤とその門流にとつては、學術研究よりも、新國學の精神の完成の方が重大であり、價値ある事業でもあつた。

橘守部は、篤胤と時代を同じくし、同じく尙古思想でありながら、宣長と理論根據を異にし、しかも宣長と同様の考證學的な精細な研究をなし、研究の分野も廣くして、一面に於ては、綜合的態度と云ふよりも、寧ろ、獨自の新見をはいた、すぐれた天才的學者である。故に、主觀的傾向に傾く所もあるが、とにかく、契沖宣長以來の傑れた學者と云ふ事が出来る。その主要なるものは歌格研究である。小國重年の長歌珠衣以後、歌格の研究者は數が多く、幕末の學者の間に一時歌格研究の流行を見たのであつたが、守部をもつて、その最高峯にあるものとする事が出来る。彼は長歌短歌文章の各方面にわたつて、綿密な型態分類をなし、視覺的表現に工夫をこらして、最もすぐれた學術的效果をあげた。歌格研究は、國語修辭學の日本の研究の大成を示すものである。

幕末の名著としては、鹿持雅澄の大著萬葉集古義、萩原廣道の源氏物語評釋の二著があげられる。何れも、從來の研究の綜合包容を試み、又獨創の見をも出したが、それは客觀的な考證よりも、寧ろ主觀的な觀賞批評、或は觀念的な古道論にあつた。古義は結局、代匠記の延長に過ぎない。評釋に至つては、宣長の源氏物語批評の態度より出でて、此の時代に流行した歌格研究の方法を文章に應用したものである。何れも既に示された大家の研究方法を敷衍大成したもので、獨創的な前人未發の名著と云ふよりも、綜合集成の手腕に價値が認められるべきであらう。

別に早く谷川士清には日本書紀通證や和訓栞の如き名著あり、更に溯つて、新井白石の東雅や貝原益軒の日本釋

名等の語源辭書、又下つて、石川雅望の雅言集覽、村田了阿の俚言集覽等によつて代表せられ、その他國學者や俳諧者流の雜學者によつて、小著の無數に出てゐる辭書的研究も、文學の綜合的整理の事業として注意に値する。塙保己一をもつて代表せられる、群書類從の如き、古典の總集翻刻の事業が起つたのも亦、此の意味に於ける著しい成績である。(尤も水戸光圀の如きは、此の點の遙かなる先賢と見なす事が出来る)。これらは、研究業績に、一の完成を示し、一段落を告げる時期の來た事を示すものである。

次に俚言集覽にも見られる、徒らなる古典研究ではなく、自己に近い江戸時代の文學言語を研究しようとする態度は、大田南畝を先驅として、山東京傳、山東京山、柳亭種彦、曲亭馬琴等の戲作者、雜學者によつて示された。俳諧、假名草子、浮世草子、淨瑠璃本等をその對象又は材料とする。これらは所謂國學者の輕蔑する所であつたから、勢ひ國學者以外の、所謂雜學者によつて主として研究せられたのである。就中、柳亭種彦を主要なる研究家とする。彼には又淨瑠璃本目錄、好色本目錄、吉原書籍目錄等の編書もある。同じく書籍解題の著者としては、群書一覽の名著あり、又、源氏や古今や百人一首等に關して啓蒙的な著述に志した尾崎雅嘉の名も忘れる事が出来ない。これも幕末の總集的研究を示す代表者の一に加へてよい。その他、古典の方面では、吉田令世の歴代和歌勅撰考、黒川春村の古物語類字抄、藤貞幹の國朝書目の如き、解題、目錄の書も多々あり、俗文學の方面では、早く阿誰軒の俳諧書籍目錄あり、下つて、撰者不明の合卷外題集や、岡田琴秀の外題鑑等あり、又、洒落本、草双紙類の評判記等、文學批評に類する著も數々ある。喜田村信節の嬉遊笑覽の如き百科辭典的著述も逸することが出来ない。何れも鳥眼圖的編述として、時代の機運の一面を表した、便利な書である。別に、國學者の觀賞批評や文學論的論考の他、儒教思想によ

る勸善懲惡主義の傾向的功利的文學論が行はれた事も注意せられる。源氏物語等をもこれによつて解釋しようとした儒者があつた。幕末に於ける戯作者の間にも、此の思想が行はれて、馬琴の如きは、その代表者であつた。

中世文學としては、徒然草の研究が最も盛んで、廣く讀まれた。又、平家物語の如き戰記物の考證研究も次第に起つて來たが、これは、武器等の有職故實の研究が主であつた。此所から、伊勢貞丈の如き故實學者も生じた。江戸時代の俗文學としては、俳諧の研究は最も早く行はれてゐて、俳諧七部集の註釋の如きは種々出た。奥の細道の如き紀行文にしても、芭蕉を餘り隔らない時代から、既に註釋的研究に着手せられてゐる。その時人に尊重せられた事が分る。

江戸時代の町人の學問は、その勢力伸長的手段として、封建的勢力と結びつき、大名に學校を建設せしめて、藩費に教授する事によつて、廣く國學の普及をはかつた。これは町人の自由な新興の學術研究の態度とは矛盾してゐたが、此の内部に包藏せられてゐた矛盾が、遂に古道精神の發展、國學の勢力の進歩に伴ひ、國民的覺醒を引き起す導火線として、明治維新の一因ともなつたのである。此所に於て、學問も封建的勢力から全く分離し、封建的制度の瓦解より、必然的に、新しい學問へ進展した。即ち、新興階級の學校制度のもとより生じた、新しい日本文學研究がそれである。

明治時代に、江戸時代の國學者の研究を受けついでものとしては、木村正辭博士の萬葉集美夫君志、飯田武郷の日本書紀通釋の如き著書が注目せられるが、新しい文科大學出の學者によつて、文學史的研究に着手せられた事が最も重要な現象である。従來にも、和歌史的考察、文章史的述作は若干あつたが、組織的に、上代より近代までの

史的研究をなしたものは、明治二十三年刊の三上參次博士、高津敏三郎氏共著の日本文學史の如きを嚆矢としてよからう。その特色は啓蒙的な所にあつて、未だ學術的水準には達してゐない。なほ、これは中等學校に於て文學史を教授するか、否かの、學制の沿革改廢とも關連して、或は啓蒙的方面に勢力を伸ばしたり、または學術研究の方面に進歩を遂げたりしてゐる。爾後、文學史的研究は長足の發達を見せた。一方、早稻田大學關係者の側からは、同じ頃、近世江戸文學の研究に着手せられ、これは外國の新文學の智識を應用して觀賞的であつた事が特色である。それ以後、新しい學校教育を受けた學者によつて、近世文學の研究も異常なる進歩を遂げた。これが明治時代の新興國文學者の研究の主要なる仕事であつた。而して、何れも、西洋文學の影響を受け、文學論も、文學の觀賞も、史的研究も、外國文學の新智識を日本文學にも取り入れようとし、それが爲めに、すべての觀方、取扱方も一變して、新文藝の豊富な智識の輸入が、日本文學の新研究の刺激となつた事は云ふまでもない。

外國人の日本文學研究も、早く、切支丹傳來の時に當つて、所謂切支丹版の中には、平家物語を啓蒙書に最も適當した對話的方法で内容を書き改め、ローマ字で記したものがあり、和漢朗詠集や太平記を紹介したやうなものも亦存する。幕末以後、外國人の本邦に往來するものによつて、或はそれらの手で、泰西に將來せられた書籍によつて、記紀萬葉以下の古典文學や柳亭種彦の浮世形六枚屏風の如き草双紙等の現代文學の外國語に翻譯紹介せられたものは尠少でなく、文學史的研究にも及んでゐる。シーボルトやフィツマイヤー等を、その先驅者の一人として、此所に名のみ記しておく。

附記 紙數の關係で、江戸時代の後半についてはこれを略記し、明治以後の研究については、別に章を設けて、日本文學の史

「的研究」の題下に述べようと思つたのを、省略せざるを得なかつた事は、甚だ遺憾である。併し、此の史的研究に關しては、別に、本講座の中に、補足し得る所があると思ふ。



昭和八年十月二日印刷
昭和八年十月七日發行

日本文學講座 第一卷

編纂者 山本三生

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 村尾一雄

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

發行所 改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座 東京八四〇二番

電話芝(43) 自一一二一番
至一一二四番

(兩角紙本)